

Title	巻頭言 自由と平等とグローバリゼーション
Author(s)	郡司, 篤晃
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2343
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭言

自由と平等とグローバリゼーション

昨年の10月の中ごろ、テレビなどで、京都大学霊長類研究所でチンパンジーを用いた実験研究の成果が報道されていた。実験は、2頭のチンパンジーを隣り合った檻に入れて、一方の檻の前で手の届かないところに好物のジュースを置く。別の檻にステッキを投げ入れると、ジュースを取りたいチンパンジーがそれを貸せと要求する。すると、要求されたチンパンジーは、自分ではジュースを取れないのに、隣のチンパンジーに貸し与える。それは数十パーセントの確率で実行され、2頭が親子の場合には90%実行された。研究者の引き出した結論は、「霊長類には利他的行為がある」というものである。しかし、それは要求された利他的行為で、人間は要求されなくてもそれを行う。それが人類の進化だというものである。

利他は福祉の最も中心的な動機である。しかし、センが言うように、福祉が実現されるためには、その国が民主国家でなければならない。福祉の実現は社会の最高の法であり目的である。福祉社会とは正義が実現される社会であり、ロールズはその重要な要素は平等であるとした。平等の本質は利他にある。

民主主義国家の誕生はイギリスの市民革命にある。田中浩先生は、最近かかれた文章の中でハリントンを引用して、イギリスの市民革命は「所有権の闘いであった」としている¹。革命の結果、多数決原理に基づく民主主義国家が生まれた。以来、民主主義国家は、国民が自らの生命と財産を保持する自由を保障することと、それを制限・統治することとの緊張関係の中にある。

我々は日々、利己と利他の緊張関係の中に生きている。利己も利他も自然に由来するが、利他は最も人間的な特性であり、そのジレンマは最も人間的なものである。

キリスト教は愛の宗教といわれている。エロスは利己を含むが、アガペーは利他であり利己は含まない。キリスト教の倫理は「己の欲するところを人に施せ」という黄金率に集約されている。

しかし、コミュニタリアンはそれでは不十分だという。なぜなら、自分が欲することといえども他人がそれを欲するとは限らないから、つまりその基準が主観的だからだという。確かに、「こども手当」に所得制限を設けるべきかどうかなどの事例に見られるように、社会的に平等を実現するためには何らかの基準が必要となる。自由な社会をつくるよりも、平等な社会をつくる方がはるかに高度で困難なことである。

自由は利己、平等は利他にその本質があるとすれば、自由と平等は現実の社会ではtrade-offの関係になる。利己の動機を是とする経済のグローバリゼーションが進行する中で、特に平等という正義をどのようにして実現していくかが、今後の世界にとって重要課題である。この問題が解決されなければ、ジャック・アタリが予言するように、世界的規模の「超紛争の時代」がやってくる可能性は否定できない²。

日本はもはや経済大国ではありえず、人口も減少してアジアの片隅の小国になるだろうが、自らが福祉国家の手本となり、どれだけ世界の福祉実現に向けてリーダーシップを発揮できるかに、日本が将来、国際社会において名誉ある地位を占めることができるかがかかっている。

聖学院大学大学院人間福祉学専攻科長 郡 司 篤 晃

¹ 田中浩「ナショナリズムとデモクラシーの「融合」と「乖離」：その歴史的・思想的考察」、『未来』未来社、No.517、2009、pp:15-29

² Jaques Attali (2006), Une Brève Histoire de L'avenir (林昌宏訳「21世紀の歴史」作品社、2008)
